

## 浄土双六用語解説

### 00.閻魔（えんま）

死者の罪を裁く、地獄にいる裁判官。閻魔王の所持する帳面には、裁かれる者の生前の行いが書かれており、その行いによって赴く場所が決定する。

### 01.等活（とうかつ）

等活地獄。八熱地獄の第一で、獄卒は鉄棒や刀等でこの地獄に堕ちた罪人の身体を破壊する。罪人は風が吹くとよみがえり、再び責め苦を受ける。殺生罪を犯したものがこの地獄に堕ちると言われる。

### 02.黒縄（こくじょう）

黒縄地獄。八熱地獄の第二で、この地獄に堕ちた者は熱せられた鉄の縄で縛られ、熱せられた鉄の斧で切り裂かれる。殺生や盗みを犯したものがこの地獄に堕ちると言われている。

### 03.衆合（しゅごう）

衆合地獄。八熱地獄の第三で、殺生や盗み、邪淫を犯したものが堕ちる地獄。鉄の山が罪人を挟み、骨や肉を粉々に潰し、熱せられた鉄のくちばしを持った鷲が罪人のはらわたをついばみ、刀葉林では筋肉が切り裂かれるという。

### 04.永沈（ようちん）

イラストは無間地獄に落ちていく様。無間地獄へ堕ちるまでは二千年もの時間を要し、五無間業（五逆罪）を犯したものが無間地獄へ行く。

### 05.無間（むげん）

無間地獄。八熱地獄の第八で、阿鼻地獄とも言う。絶え間なく苦しみを受け、楽が交じることがない。地獄の最下層であり、最も凄惨な場所。

### 06.大焦熱（だいしょうねつ）

大焦熱地獄。八熱地獄の第七で、焦熱地獄の下にある。等活地獄から焦熱地獄を合わせた十倍の苦しみを受ける。罪人は焦熱地獄の炎よりさらなる熱で焼かれて焦げると言う。

### 07.焦熱（しょうねつ）

焦熱地獄。八熱地獄の第六で、大叫喚地獄の下にある。殺生、盗み、妄語、飲酒の罪を犯したものが堕ちる地獄。罪人は炎によって焼かれ炙られることから「焦熱」と呼ばれる。

### 08.大叫喚（だいきょうかん）

大叫喚地獄。八熱地獄の第五で、叫喚地獄の下にある。罪人は叫喚地獄よりも大きな鍋や釜で茹でられたり焼かれたり、叫喚地獄より大声で泣き叫ぶことから「大叫喚」と呼ばれる。

09.叫喚（きょうかん）

叫喚地獄。八熱地獄の第四で、衆合地獄の下にある。堕ちた者は熱湯が煮えたぎる大釜の中に入れられる。また、火が燃えたぎる鉄の部屋に入れられ、苦しみ泣き叫ぶこととなる。殺生、盗み、邪淫、飲酒を犯したものが堕ちる。

10.土神（としん）

土の神。

11.山神（さんしん）

山の神。日本土着の信仰としての神と考えられ、山や自然界の中に住まう神。

12.龍王（りゅうおう）

龍の王、蛇の王であり仏法を守る。釈尊が菩提樹の下で瞑想している際に、雨が降ってきたが、龍王が自ら傘となって釈尊を覆ったという。

13.水神（すいしん）

水の神。山神と同様、日本土着の信仰として、川や海の中に住まうと考えられる神。

14~15 はなし

16.修羅（しゅら）

戦争をした者や慢心の強かった者が死後に堕ちる争いの絶えない世界。

「阿修羅」は後代インドでは、悪伸とされ、常にインドラ神と戦い日や月と争う者となる。仏教では六道の一つ、八部衆の一つとされ、一種の鬼神とみられ、須弥山の大海底に住居があるとされる。

17.畜生（ちくしょう）

欲望が多く、だれかれの区別なく争い苦しみが多い世界。

18.有財餓鬼（うざいがき）

餓鬼の中でも人から施されたものを食べることができる餓鬼。多くの飲食ができるが、どんなに贅沢をしても満ち足りることはない。

19.無財餓鬼（むざいがき）

この世界に堕ちた者は飢えや渴きに苦しみ、食物を手に入れても食べようとすると燃えて食べることができない。

20.摩睺羅（まごら）

仏教を守護する神の1つ。蛇の神で人型でありながら首から上は蛇の姿をしていると言われる。

## 21.緊那羅（きんなら）

美しい声音を持ち、歌舞をなす天の楽人。乾闥婆と共にクベーラ神に仕え、音楽を奏する。

## 22.北洲（ほくしゅう）

北俱盧洲（ほくくるしゅう）とも言い、大陸の形は正方形となっている。ここに生まれた者は寿命が千歳であり、衣食住に困ることがない。この土地に住む者の行いは、仏法に叶っているため、次の生は善趣に生まれることがあるが、悩みや困難も少ないため修行をするには最も不適切な場所である。

## 23.西洲（さいしゅう）

須弥山の西側に位置し、大陸の形は円形となっている。須弥山の西面が水晶で出来ており、この地に住む者は牛などを貨幣として扱うと言われる。

## 南閻浮洲（なんえんぶしゅう）

須弥山の南側にあり、仏教の思想では我々が住んでいる大陸であるとされ、仏に会うことができる土地。大陸の形が正三角形に近い形または逆三角形になっており、インドの地形と言われている。

## 24~25 はなし

## 26.東洲（とうしゅう）

須弥山の東に位置し大陸の形は半月形をしている。須弥山の東側が銀で出来ていると言われ、この大陸に住む人の姿は優れていると言われている。

## 27.中有（ちゅうう）

亡くなってから次の生を受けるまでの間の期間。この期間が四十九日であるという説から、人の死後七日ごとに経典を読み、七回目の四十九日に死者の冥福を祈る「四十九日」の習慣が起こった、と言われる。

## 28.夜叉（やしや）

人を傷つけ、食すと言われる鬼神で、血肉を啜るおぞましい姿で描写されることがある。仏法を守る八部衆の一つでもあり、毘沙門天の眷属である。『浄土双六』では、薬壺らしきものも所持しているため、毘沙門天の眷属としての夜叉であると考えられる。

## 29.乾闥婆（けんだっぱ）

仏法を守る八部衆の一つで、緊那羅とともにクベーラ神に仕える楽士で音楽を奏上する。

## 30.風天（ふうてん）

もとはインドの神であったが、仏教に帰依し仏法を守護する役割を担う。風を司る神で、『浄土双六』では「風神雷神」の風神を指すと考えられる。

31.魚類（ぎょるい）

32.鳥類（ちょうるい）

33.修道（しゅどう）

見道の時に得た真理を繰り返し反復して修行する段階。

34.加行（けぎょう）

資量位で蓄積したもとの上に無漏智を得るための修行を加える段階。

35.資量（しりょう）

悟りや修行のもとのとなる功德や智慧を蓄積する段階。

36.見道（けんどう）

四聖諦という真理を見る段階。

37.虫類（ちゅうるい）

38.迦楼羅（かるら）

龍を食べると言われ、両翼を広げると三百六十万里あると言われる。口から炎を吐き、不動明王の後背の炎は迦楼羅が吐いた炎（迦楼羅炎）であると言われる。

39.雷神（らいじん）

雷を司る神。『浄土双六』では「風神雷神」の雷神を指すと考えられる。

40.梵輔天（ぼんほてん）

梵衆天の上にある色界初禪天の第二天に存在する神。梵天の前で行列を守護する。

41.梵衆天（ぼんしゅてん）

他化自在天の上にある色界初禪天の第一天に存在する神。大梵天に統轄される。

42.他化自在天（たけじざいてん）

樂變化天の上にある欲界天の第六天に存在する神。欲界天の最高の場所で他の天の欲望の対象を自在に受用して樂を受ける。

#### 43.楽変化天（らくへんげてん）

兜率天の上にある欲界天の第五天に存在する神。自ら欲望の対象を作り出すことができ、また、それを自ら楽しむことができる。

#### 44.内兜率（ないとそつ）

兜率天の内院で弥勒菩薩が住んでいると言われる。

#### 45.兜率天（とそつてん）

夜摩天の上にある欲界天の第四天に存在する神。仏となる菩薩が住み、釈迦仏もかつてこの天で修行した。現在は弥勒菩薩が兜率天で説法をしており、この天に住む者の寿命は四千年、その一日が人間界の四百年にあたるという。

#### 46.夜摩天（やまてん）

忉利天の上にある欲界天の第三天に存在する神。昼夜がなく、歓楽を受ける。一日が人間界の二百年に相当し、寿命は二千歳と言われる。

#### 47.忉利天（とうりてん）

須弥山の頂上にある欲界天の第二天に存在する神。中央に帝釈天が住む。四方に峰があり、峰ごとに八天あるため、三十二天、帝釈天を合わせて三十三天となる。

#### 48.四王天（しおうてん）

四天王がいる欲界天の第一天に存在する神。四天王とは、帝釈天に仕えて仏法を守護し、仏に帰依する人たちの守る護法神。東に持国天、南に増長天、西に広目天、北に多聞天（毘沙門天）。

#### 49.仙人（せんじん）

人里を離れて山や森に住み、不老不死でさまざまな術を使うと言われている人。

#### 50.預流向（よるこう）

「須陀洹向（しゅだごんこう）」とも言われる。欲界、色界、無色界の煩惱を断じつつあり、預流果へ向かい修行を積んでいる見道の段階。

#### 51.預流果（よるか）

「須陀洹果（しゅだごんか）」とも言われる。初めて聖者の流れに踏み入った、入り口の段階。さとりに向かう四つの段階のうちの第一で「極七返生（ごくしっぽんしょう）」とも言われ、最大限七回善趣へ生まれ変わると阿羅漢となる事ができる。

## 52.一来向（いちらいこう）

「斯陀含向（しだごんこう）」とも言われる。一来果へ向かう、修行によって断じられる欲界の九種の煩惱のうち、六種を断じつつある段階。

## 53.一来果（いちらいか）

「斯陀含果（しだごんか）」とも言われる。修行によって断じられる欲界の九種の煩惱のうち、六種を断じ終わった段階。一来果にある者は、一度天界に生まれたのち、再び人間に生まれて悟りを得るため、「一来」という。

## 54.不還向（ふげんこう）

「阿那含向（あなごんこう）」とも言われる。不還果へ向かう修行を積んで、一来では断じることができなかった残りの煩惱を断じつつある段階。

## 55.不還果（ふげんか）

「阿那含果（あなごんか）」とも言われる。欲界の煩惱をすべて断じて、再び欲界に戻ってくることなく悟りに至る段階。そのため「不還」と言われる。

## 56.羅漢向（らかんこう）

「阿羅漢向（あらかんこう）」とも言われる。不還果に進み、残りの煩惱をすべて断ち切り阿羅漢果へ向かう段階。

## 57.羅漢果（らかんか）

「阿羅漢果（あらかんか）」とも言われる。初期の仏教における最高の境地であり、すべての煩惱を断ち切った状態。預流向から阿羅漢向までは、「有学位」と呼ばれるのに対し、阿羅漢果は学ぶべき法がすでに尽きており、学ぶことが無いため「無学位」とも言う。

## 58.十信（じっしん）

菩薩が修行すべき五十二段階のうち、下位から数えて一番目から十番目を言う。

仏の教えに入ろうとするものは、十種の信の心を持つことから十信という。

（一）信を起して成就を願う「信心」（二）六念を修する「念心」（三）進んで善を修める「精進心」（四）心を安住にする「定心」（五）すべての事象は空であると知る「慧心」（六）戒律を遵守する「戒心」（七）善根を菩提に廻向する「廻向心」（八）己の心を守り修行する「護法心」（九）財や身体を惜しまずに喜捨する「捨心」（十）様々な願いを修する「願心」の十である。

## 59.三賢（さんげん）

大乘仏教における菩薩五十二段階の十一から四十の者を十ずつの単位でまとめて「三賢」と言う。

60.広果天（こうかてん）

福生天の上、無煩天の下にある色界四禪天の第三天に存在する神。

61.無雲天（むうんてん）

遍浄天の上にある色界四禪天の第一天に存在する神。雲地がない最初の天。

62.遍浄天（へんじょうてん）

無量浄天の上にある色界三禪天の第三天に存在する神。浄らかな光が遍く周りへ届くため、遍浄天と言われる。受ける楽や浄が遍く満たされている。

63.福生天（ふくしょうてん）

無雲天の上にある色界四禪天の第二天に存在する神。福德を積んだ人間が生まれる。

64.無量浄天（むりょうじょうてん）

少浄天の上にある色界三禪天の第二天に存在する神。はかりしれない浄らかさを具える。

65.少浄天（しょうじょうてん）

極光天の上にある色界三禪天の第一天に存在する神。楽を受け浄らかであるが、それが第三禪の天の中で最少であることから、少浄天と呼ばれる。

66.極光天（ごっこうてん）

無量光天の上にある色界二禪天の第三天に存在する神。この天に住む者が何かを語る際は、口から浄らかな光を発して言葉（音声）とする。そのため、光音天とも呼ばれる。

67.無量天（むりょうてん）

少光天の上にある色界二禪天の第二天に存在する神。この天に生まれた者は身体から無量の光を放つため無量天と呼ばれる。

68.少光天（しょうこうてん）

大梵天の上にある色界二禪天の第一天に存在する神。天の中でも未だ光を発することが少ないことから少光天と呼ばれる。

69.大梵天（だいぼんてん）

梵輔天の上にある色界初禪天の第三天に存在する神。仏法の守護者である大梵天王が住む。大梵天王は仏が世に現れるごとに必ず最初に来て説法を聞き、白払（びやくほつ）をもって帝釈天と共に仏の左右で守護する。釈尊が成道した際、教えを説くように勧請した梵天はこの天に住むと言われている。

70.無想天（むそうてん）

色界天に存在する神。無想定という禅定を修めることによって到達する境地。外道はこの境地を煩惱を滅した最高の状態（涅槃）であると誤解してしまうと言われる。

71.無煩天（むぼんてん）

広果天の上にある色界四禅天の第四天に存在する神。五淨居天の一つ。欲界の苦しみも色界の楽もともに離れて、悩みや他を傷つけようとする害心などが存在しない。

72.無熱天（むねつてん）

無煩天の上にある色界四禅天の第五天に存在する神。この天に生まれた者は、苦しむことがなく心が清涼なため、無熱天と言われる。

73.善現天（ぜんげんてん）

無熱天の上にある色界四禅天の第六天に存在する神。五淨居天の一つ。善の果報が現れやすいということから善現天と言われる。

74.善見天（ぜんけんてん）

善現天の上にある色界四禅天の第七天に存在する神。五淨居天の一つ。妨げが少なく、清きことをよく見極めるために善見天と言われる。

75.色究竟天（しきくきょうてん）

善見天の上にある色界四禅天の第八天に存在する神。五淨居天の一つ。色界最上の天であるため色究竟天と言われる。

76.空無辺處（くうむへんじょ）

無色界の第一天であり、物質的な存在が皆無で無辺の空間を観じる禅定の境地。

77.識無辺處（しきむへんじょ）

無色界の第二天であり、空無辺處を超えて、認識作用に限りがないと観じる禅定の境地。

78.無所有處（むしょうじょ）

無色界の第三天であり、いかなるものもそこ存在しないと観じる禅定の境地。

79.非非想處（ひひそうじょ）

無色界の最高の天であり、想があるのでもなく、ないのでもないと観じる禅定の境地。非想非非想處（ひひそうじょ）とも呼ばれる。天界、そして存在世界における最上部であるため、「有頂天（うちょうてん）」とも呼ばれる。

#### 80.十地（じゅうじ）

大乘仏教において菩薩が修行すべき五十二の段階のうち、特に第四十一から五十二までの間にある菩薩が、菩薩として最高の境地に達した状態であり、仏の後を継ぐ位。法雲地、法雨地などとも言われる。

#### 81.九地（くじ）

正しい智慧によって存在するものすべての姿をありのままに知り、衆生を教化する菩薩の位。善想地、善慧地などとも言われる。

#### 82.八地（はちじ）

「空」のさとりを得た菩薩の位で、動揺したり後退することがなくなる。この位に達した菩薩は「深行（じんぎょう）の菩薩」と呼ばれ、自力ではなく、自然に仏道を歩む。不動地とも言われる。

#### 83.七地（しちじ）

方便の智慧によって十の妙なる行いを現す菩薩の位。遠行地、深行地などとも言われる。

#### 84.六地（ろくじ）

妨げのない究極の智慧の光が現前する菩薩の位。現前地、現在地などとも言われる。

#### 85.五地（ごじ）

四つの真理（四諦）など、あらゆる真理を知りつくし、現実世界のすべてを理解する菩薩の位。難勝地とも言われる。

#### 86.四地（しじ）

輝き始めた智慧の光が明るさを増してくる菩薩の位。焰光地、焰慧地などとも言われる。

#### 87.三地（さんじ）

十種の深い心によって光を発する菩薩の位。十種とは、①浄らかな心（浄心（じょうしん））②強い心（猛利心（みょうりしん））③世俗を厭う心（厭心（えんしん））④欲望を離れた心（離欲心（りよくしん））⑤退かない心（不退心（ふたいしん））、⑥堅固な心（堅心（けんしん））⑦明るい心（明盛心（みょうじょうしん））⑧求め続ける心（無足心（むそくしん））⑨すぐれた心（勝心（しょうしん））⑩大きな心（大心（だいしん））を身につけることによって、三地に入ることができるとされる。発光地、明地などとも言われる。

#### 88.二地（にじ）

主に戒律を修め、汚れを離れきって、衆生に対する慈悲の心を養う菩薩の位。離垢地や無垢地などとも言われる。

#### 89.初地（しょじ）

大悲を主とし、さとりに心を起こすことによって、凡夫の世界を離れて菩薩の位に入り、歡喜に溢れた境地。歡喜地とも言われる。

#### 90.右補處（うふしょ）

#### 93.左補處（さふしょ）

仏の処を補う菩薩の位。この位にある菩薩は、一度だけ迷いの世界に生まれて次の生で仏となる。菩薩として最高の境地であり、「一生補處の菩薩」と呼ばれる。『浄土双六』では、マス目として仏の左右に配置される。

#### 91.等覺（とうがく）

大乘仏教において、仏と平等の悟りを得た菩薩の位。そのため、等覺と言われる。

#### 92.妙覺（みょうかく）

菩薩の修行の最後の段階で、煩悩をすべて断じて智慧が具わった状態。等覺の上の位。

#### 仏（ほとけ）

煩悩をすべて断じ、自ら真理を悟り、他人を悟らせる、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道輪廻から永遠に解脱した者。

#### 参考文献

木村清孝『華嚴経入門』角川ソフィア文庫,2015年

中村元『仏教語大辞典』東京書籍,1981年

ポー・オー・パユットー『ポー・オー・パユットー仏教辞典 仏法篇』サンガ,2012年

向井真人『浄土双六ペーパークラフト用語集』ゲーミフィジヤパン,2018年